

## 第44回夏季大学「新しい気象学」実施報告

教育と普及委員会

日本気象学会は、最新の気象学の普及を目指して、小・中・高等学校の先生方と気象を学ばれている学生や一般の方を対象とした講座を「夏季大学」と銘打って、毎年夏休みの時期に開催している。第44回（2010年）は、「気象観測技術の最前線」をテーマに取り上げ、8月7日（土）、8日（日）の2日間、茨城県つくば市の気象研究所講堂で開講した。

近年の科学技術の進歩にともなって様々な新しい気象観測技術が生み出され、日々の天気予報や大気環境の監視等に活用されている。今回の夏季大学では最新の気象観測技術としてドップラーレーダー・電子顕微鏡・ドップラーライダー・ライダーネットワークを取り上げ、その原理や観測・解析の実際について講義と実習を行った。また、こうしたデータが数値モデルにどのように活用されているかに関して、最新の技術であるデータ同化についても講義を行った。各日の午後にはそれぞれ、気象研究所と国立環境研究所の施設見学も行い、観測施設を実際に見ることで理解をさらに深めてもらうようなスケジュールとした。講師名と講義題目を、第1表に掲げる。

第1表 第44回「夏季大学」の講義題目と講師名（敬称略）。

8月7日（土）	
古くて新しい観測装置気象レーダーの話	鈴木 修（気象研究所）
雲の種を探る	財前祐二（気象研究所）
見えないものを観る、掴めないものを掴む最新観測技術 －風の流れと雲－	藤吉康志（北海道大学）
気象研究所観測施設見学	
8月8日（日）	
ライダーネットワークでエアロゾルの三次元的な動態を捉える	杉本伸夫（国立環境研究所）
大気微量成分のデータ同化	関山 剛（気象研究所）
国立環境研究所観測施設見学	

講義では、レーダーやライダーの観測原理の説明や

最新の観測技術の紹介に始まり、お湯とシャボン玉を使った実験を通じて、凝結核の存在による雲の形成を理解する実習、講義当日のライダーデータから大気微量物質の状況を診断するなどバラエティに富んだ内容であった。また、数学的で難しいと思われるデータ同化についても、非常に簡単な例でエッセンスを説明するなど、普段の講義にはない場面も見られた。また、気象研究所、国立環境研究所の見学では、ライダー装置（第1図）等、普段なかなか見られない観測施設を見ることができ、受講者にも好評であった。ご多用の中、工夫を凝らした講義を準備していただいた講師各位、施設見学を行うにあたり各種手続きや当日の説明対応をしていただいた気象研究所、国立環境研究所の関係各位に感謝したい。

今回の受講者は60名程度で、年齢は10代から80代までと幅広い年代の方々が参加した。講義や見学、休憩時間中にも熱心に質問をする方も多く見られ、主催者側としては嬉しい限りである。

全講義終了後に受講者から提出していただいたアンケートによれば、講義の難易度に関しては概ね「適当である」という回答であった。内容に関しても「興味深い」と回答が多数であった。テーマや難易度としてはおおむね適切であったと考えられる。また、夏季大学開講のお知らせを知ったきっかけとしては、「天気」、「気象学会ホームページ」、「気象予報士会メーリングリスト」という回答が大多数を占めており、夏季



第1図 国立環境研究所での施設見学風景。大気中のエアロゾルを計測するライダー装置の説明を受けている。

大学開講を周知する媒体が限定されていることも分かった。今回の受講者の内、初参加の方々が約30%であったが、今後は宣伝媒体を充実させ、より多くの方に開講を知っていただけるようにしたい。今後希望するテーマとしては、局地風に関する話題や、衛星画像の解析、気象情報の利用方法に関する内容、極域の気象に関する話題など、さまざまなご要望をいただき、受講者の興味・要望も年々多様化している傾向がみられた。これらのご意見を参考にしながら、今後ともさらに充実した夏季大学を企画したい。